

●春日部市民文化講座（第19回）

◆日 時：2015年12月2日(水)10時（ぼぼら春日部4階会議室）～11時

◆テ マ：講演「羽子板の歴史と味わい」

講師：京極 寿一さん（押絵師、絵羽子板工房「琴山」）

◆ゲスト紹介：《前掲と同じ》

■羽子板の歴史

羽子板の歴史は、今から500年前の室町時代に「正月に羽子板を用いた」という記述があることを前回お話しし、押絵も「貼り絵」から発展してきたことをお話ししました。

■春日部市の押絵羽子板の歴史

春日部市の押絵羽子板は、戦後、浅草の押絵師たちが戦禍と雑踏から逃れ、良質の桐の産地であった春日部に移り住んだことに始まります。浅草の浅草寺周辺では、江戸時代から毎年12月17・18日に正月用品や縁起物売る店が境内に集まり「歳の市」が開かれました。江戸時代に入ると歌舞伎役者などをかたどった押し絵羽子板が流行し、元禄期以降は遊びの道具としても定着しました。そうしたことから、江戸時代から戦前までは浅草周辺に押絵師が多く住んでいたのです。春日部市内では、現在でも羽子板を小学校の卒業生たちに2枚渡して好きな絵を描いてもらい、1枚は学校に残し、1枚は思い出として自分でもってもらうという学校もあり、私も絵の指導に年1回行っています。



〔助六〕



〔花魁・揚巻〕



〔揚巻の下絵〕

■目に焼き付ける

押絵羽子板には一般的に男物と女物と呼ばれる2種類があります。この男物というのは、「狂言物」ともいわれ、歌舞伎狂言を題材とし、役者が見えを切ったときの表情や仕草を躍動的に描いたものです。衣装の絵柄も豊富で、羽子板の中に忠実に役柄の特徴を表現しています。「見立て物」は、歌舞伎舞踊の中から若い女性の舞を表現したものです。我々職人というのは、一つ一つ芝居を見に行き羽子板を作ります。例えば、歌舞伎十八番に「勸進帳」があります。源義経一行が奥州へ逃げる際の安宅の関の場面ですが、山伏姿の弁慶を描く場合に、衣裳は決まりがあるので替えられません、役者それぞれに特徴があり、幸四郎はこうやった、団十郎はこうやったと、同じ勸進帳でもそれぞれの舞台を何十回と見ないと面相が描けないということなのです。それが自分たちの使命感みたいなものです。弁慶の面相を描くにも、強さだけがあったのではお客様に喜ばれない。そこに男の色気というか、甘さがなんとか表現できないかと努力するのです。羽子板を作っていくには、本物を見て自分自身の肌で感じて、それを軸にして作っていく。それが基本でないといけない。写真を見て作るのでは中身の無い物になってしまうのです。押絵羽子板の下絵を作るためには、歌舞伎の演目を7回も8回も見て、良い場面だと思うところを帰ってからデッサンします。歌舞伎座では写真を撮ることができませんので、目に焼き付けてくる必要があります。衣装もデッサンして、歌舞伎衣装にできるだけ忠実に作っていきます。助六の隈取りも面相筆で薄線を何度も引いて描いていきます。花魁・揚巻の櫛も布に綿を入れて表現します。髪は蚕の糸を撚りあげて作っています。さまざまに工夫をして出来上がった時には良かったと思うのですが、試行錯誤ですね。

■さまざまな羽子板

現在の押絵羽子板は飾り物として喜ばれますが、昔は、板に直接絵を描いた「描絵羽子板」（かきえはごいた）や、紙や布を張った「貼絵羽子板」（はりえはごいた）とともに、胡粉で彩色し、金箔、銀箔等を押したり蒔絵をほどこした豪華で華やかな「左義長羽子板」（さぎちょうはごいた）というものもありました。昭和初期には宝塚の俳優の左義長羽子板もありました。また、明治以降では羽根つき用に、絵の輪郭部分を焼き絵といって電機コテで焼いて塗り絵をした焼き絵羽子板というものもあります。当初は羽根突きの道具として用いられていた羽子板が、徐々に厄払いとしても使われるようになり、正月の魔除けとして女物は、女の子が元気に丈夫に育つようにと祈って贈られます。男物は、不景気をはねのける縁起物として喜ばれています。

歌舞伎見物も押絵師の方々にとっては真剣勝負なのですね。一つの演目を何十回ですか…凄いです！